





志卷之二

目録

新宮権現 同圖  
 田村丸糸指圖  
 十神奉  
 開山堂 同圖  
 手掛石  
 枳御門  
 山王社  
 龍尾瀑布  
 石鳥居  
 唐洞地蔵同圖  
 未社 慈光堂 金剛堂 山王社 阿彌陀堂  
 神興りあまの 例祭  
 延年舞  
 佛岩  
 産官  
 御神馬碑  
 唐洞地蔵  
 牛王橋  
 弘法大師女辨中宮額  
 新白石  
 勝道上人墓  
 飯盛杉  
 下乗石柱  
 不動堂  
 別所  
 龍尾社圖  
 御神位  
 教皇座主墳墓  
 津供所 宝物  
 新宮 同圖  
 十八王子社  
 大星天堂  
 唐洞地蔵同圖  
 未社 慈光堂 金剛堂 山王社 阿彌陀堂  
 神興りあまの 例祭  
 延年舞  
 佛岩  
 産官  
 御神馬碑  
 唐洞地蔵  
 牛王橋  
 弘法大師女辨中宮額  
 新白石





龍尾靈神影向圖

二王樓門

本社

本地堂

酒泉

碑石

妙覺橋

寶物

茶師靈水

常行堂

御靈廟

慈眼大師庵

經筒 同圖

拜殿

禮拜石

根本堂

三十番神堂

鎮火祭

等覺橋

筋遠橋

地蔵堂

法華堂

文殊堂

鐘樓

中門

千手堂

子種石

三本摺

五念橋

多宝鐵塔 同圖

行者堂

慈惠大師堂 天狗堂

極子場

御供所

求聞持堂

功德水

御拜殿 石燈籠

兩大師略傳

鳴子

床神事

阿彌陀堂

鐘樓

御廣菴

入峰禪頂

古尊系石系隼人 同圖

御座主所 同圖

經藏

御宝塔

大千度



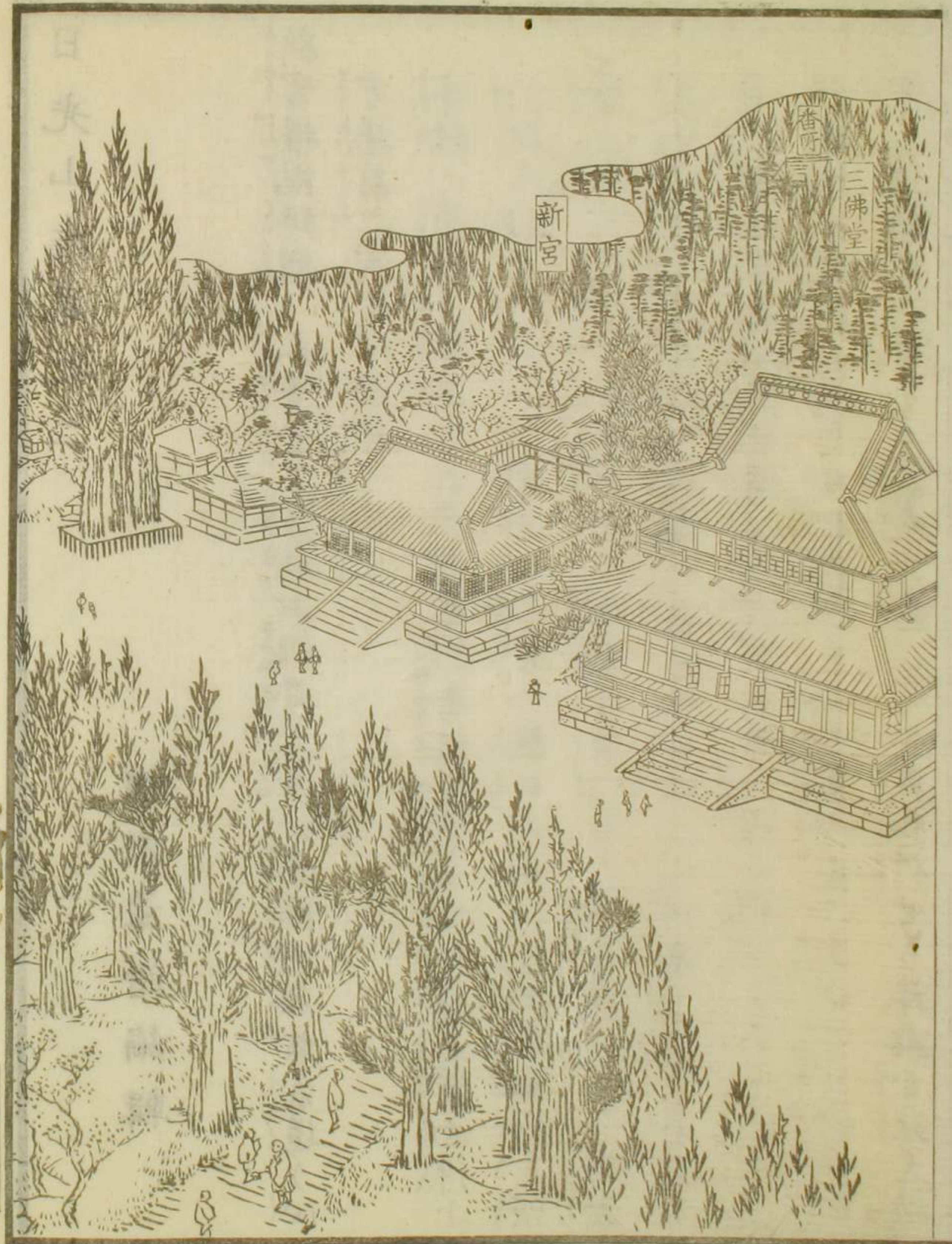
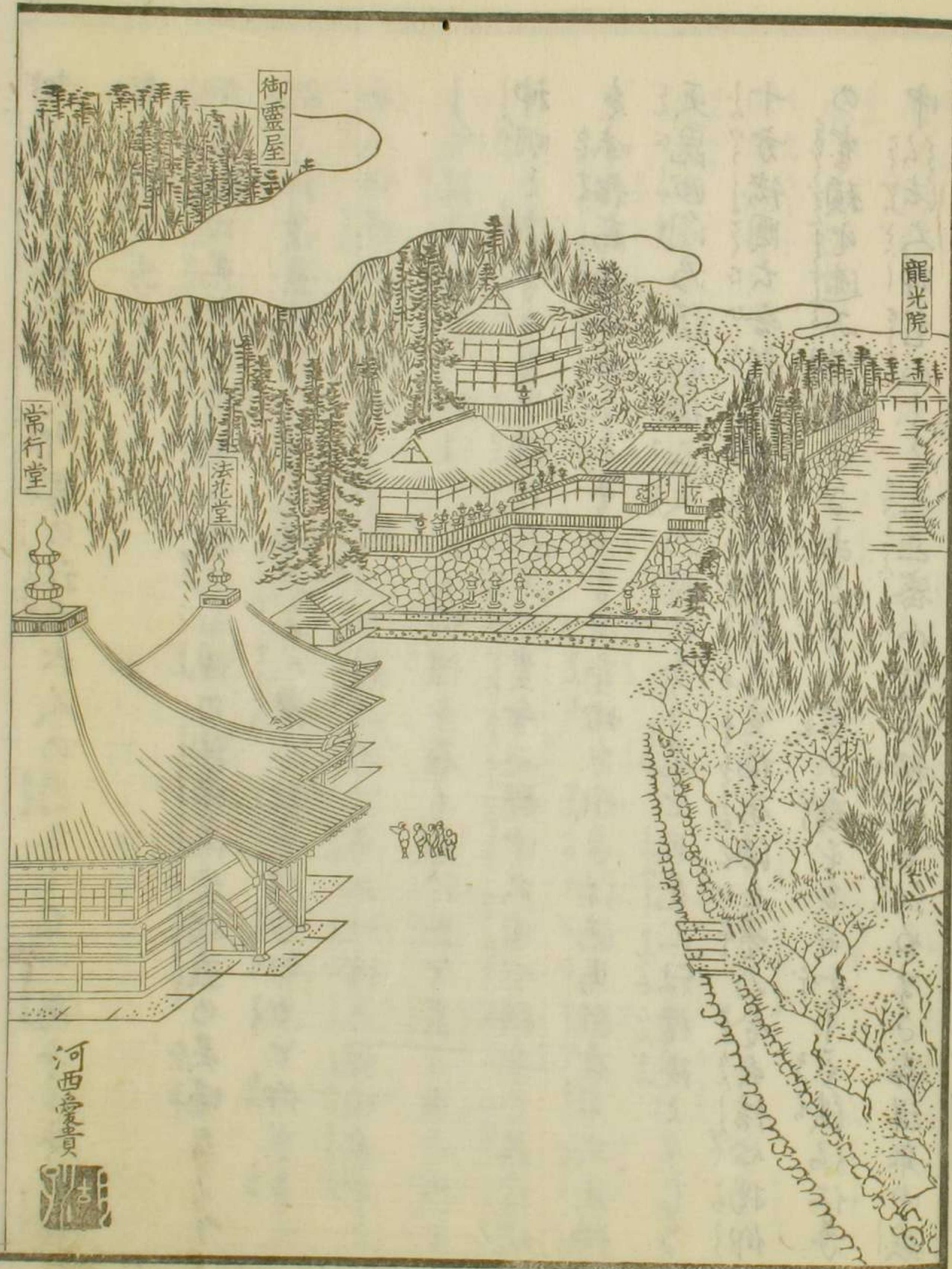
日光山志卷之二

植田孟縉編輯

新宮権現拜殿 三佛堂とお双小銅葺赤塗四方縁大床窓造り四  
方揚藪六間小七間許

本社 南向八棟造り六間四方銅葺赤塗正面之扉墨塗向洋小  
正神乃額と掲ぐすこ梁間は合色の懸口之掲ぐす欄彫物彩色演  
縁三方一折也一格天井階墨塗前は唐門あり銅葺此門より瑞籬  
本社乃後を折也也也銅葺凡格六間は拾八間許唐門外の左右は  
石燈籠数奉唐銅大燈籠を麻沼檜三扉入道に納るそのあり末社  
の堂宇八楹外はあり本社系神を大己貴命あり本地千手觀音例  
祭三月朔日二日なり近奉の露ごとく古式執行せり神輿本社を渡







河別所を安養院又河宮の社家六人の内より一箇なるその社  
勢と司るありあり

抑當社日光之社権現を普門示現の神境佛乘相渡の異場あり  
仍く神護景雲乃む一勝道上人深く観音此妙智力と仰ぎをく

吾人の境小入る遂に黒髪山の巖小堂り治小村地之神明忽茲と  
して現進むひて佐人法と擁護を盡くと神物を数りむ小地之

神明と中なるを男體権現大已貴命女體中矣田心姫命本文権現  
を味耜高彥根命よりすす本地在千手鉢陀馬頭應用大延辨

天毘沙門乃福智徳三天乃権化なり是を日光之社権現と中なる  
十方諸國去無利不現身慈眼視众生福壽海無量乃合云信心掲仰

の誓願を述ふ満足するあり誓の誓小應するあり如く其後弘仁寺  
中弘法大師宅山より考之密入智の秘法を弘めす嘉祥年中慈

覺大師降りしひ双々遮那止観乃兩業を弘免治小室初尚社を兼  
管一玉ひけり尚山乃古縁記小を三神始り勸誘乃身を開山上人

曰本龍寺に玉玉ひ一時精舎乃東南小初り勸誘一玉ひ其後  
遷宮の事ありしに仍て河神をひく玉玉治ひし身日記小見え

あり其初上人之神乃壘像と安養の社地を大河に接せし位地小  
一々時々洪水逆浪一社既終ハ危かりん身を思惟し玉ひ河

遺牙道珍教曼干如等と相識して天長年中社殿を小玉殿の東に  
移し治し其後二十餘年を經り嘉祥三年癸丑昌祿攝下の尊徳

法福等と識せし法華常行の二堂此後を東為中院の中央小尚  
りて勝地此所小色毎りり此二堂を遷宮し有り治小といひ

法華常行の二堂の後に此の位置に此時始り曰本龍寺の旧社を本宮  
社地今も神宮内遷移の迹あり尚也

と稱し遷宮の社既と新宮と号し有るといふ又其後を十六代の







寧に帰せし

帝より山に神を敷威しし初使下向るて日光大権現  
正一位勲一等位階を授賜し其後北國の夷賊蜂起せし  
坂上田村麿等て兵力を獨り奮向の初田村將軍之が初  
朝敵退治乃預書を奉るて進出陣せし進に夷賊悉神助に仍  
平治せしを田村將軍大いに神徳を仰ぎ勲馬弓箭甲冑等儀  
権現乃社殿を獻し神徳を感謝し奉るて帰洛の上此旨具奏す  
遂ら進しを朝廷倍々尚社乃神徳を敷威りし武藏相模  
陸上總下総六箇國乃貢物多し二分一宛永代日光山へ寄す  
き旨初報省しと心しす  
高倉院の所宇元暦元年二月右左衛門佐源頼朝平氏討寇の事を  
當社へ祈請しむし小遂に歳おとせぬして平族を西海に追

村一源氏一統の世と源贖日本國総追捕使に任ぜし進日本  
と當權せし進國郡守護を盡し莊園小を地改を補し日本國中  
家小おひし始て武家乃世となりしを全日光乃神助に依進り  
空て下野國の内久野大井の両郷を大権現の枕油料小寄置し  
て一國の地改無事家人等と日光此所役を完治ふと而して文治  
年奥州乃泰衡征伐乃初もまの所願を尚社に遂ら進す依し初  
く村平け治し頼朝卿を敬護ししを神贄を備へ神劍を奉納せし  
れ之上肥前目知行を所使として那須庄乃内六箇郷を以て毎  
年神贄の物料而し完置し又森田日向の両郷として永代日所供  
料小寄置しし法華三昧料として高國寒河郡小を免田十六町  
と寄附せし依建曆三年六月和国乱乃時日光山別當辨覺所  
所味方に奉るしに依て所威の上念を蒙りて九州筑紫





相  
覧  
土  
信



田村磨奥州凱旋  
の御新宮社に参拜

二  
ノ  
五



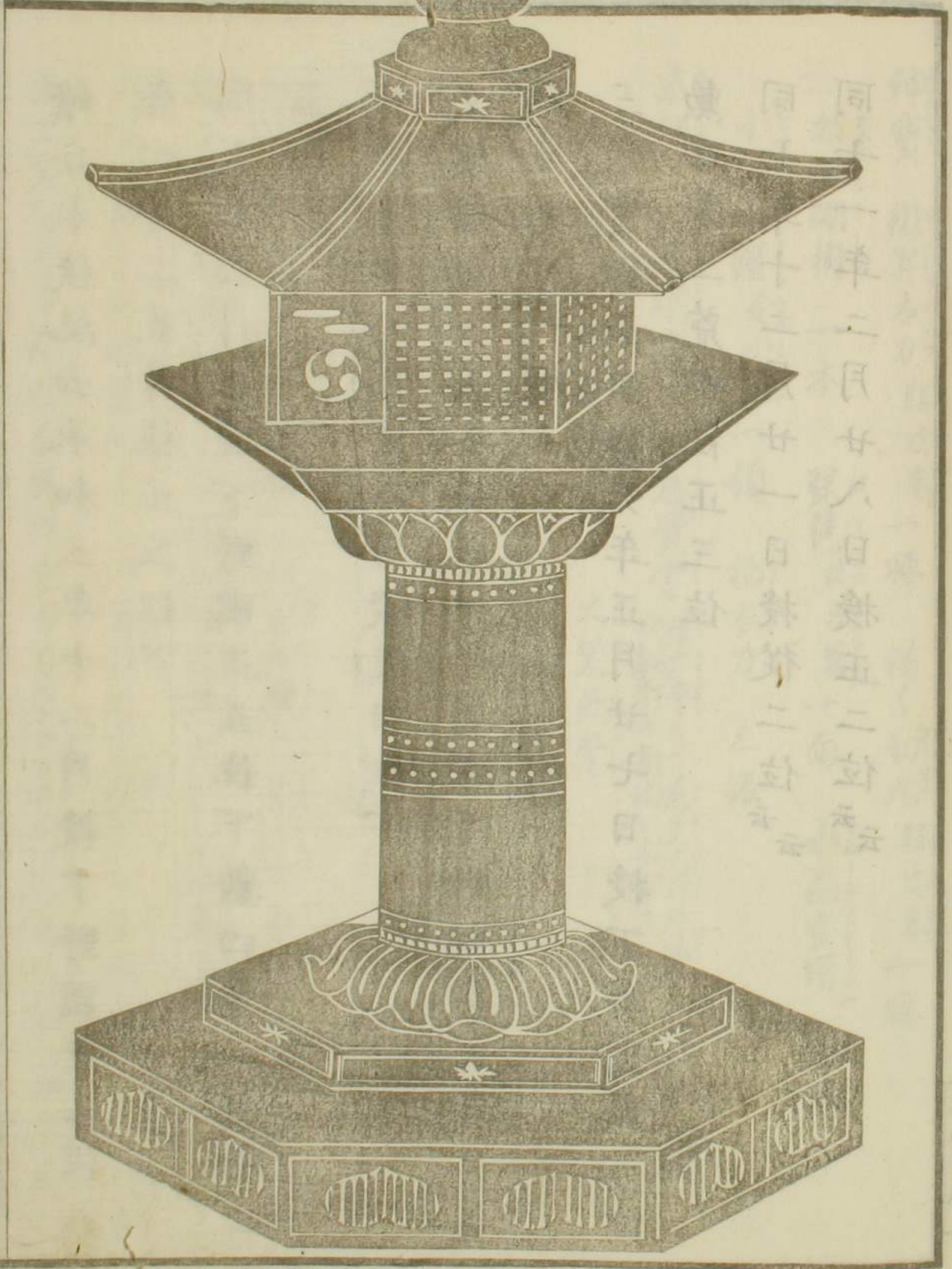
ありて其の莊を獨りし後

飛山院の文永年間

後宇多院の弘安年間蒙古の兵械本邦を襲ひんとせし時あるに  
り小日光庵を勅命を被り大衆を率ひ高社の神殿に於て夷兵  
降伏乃祈禱丹誠を抽らば一七日結願の雨一社檀三夜  
震動して忽ち一筋の神籬西に向ひて飛鳴し其を雨とあはれ  
爾して後ほどなく兵國の軍船悉く没せし中高社の日記に載り  
りといふ世々乃朝敵滅亡の奇瑞のみならず此靈徳威靈八万人乃  
願祈は悉くあはれと恰も嘗の夢に似し如く仍て往昔より近國  
の諸侯結城小山守於矣那須等と初め大権現の冥助と仰がご  
をたす時々奉納の古刀曼陀羅經と宝物と成て現存に往昔靈  
より時々修造せしれ一月毎も具に日記に記し見えしより一

倉も元弘正慶以来を一旦亡國となり貞和親愛の比を臣利公方  
家瑞倉も河内を據へてみらひあられと免戦國の存弊あり國保  
保合親をえざれといつて社殿修造の事も怠り動もす進を社  
の田畠山林も侵掠せし進治満山衰廢せし爾のとき乃て織田氏  
豊臣氏の爲に佛寺を破却せしれ社殿をも悉くら進するより一  
時又至て程又一山廢頽し社殿系雲以来連綿する法燈も既して消  
滅すべし一山天運循環し慈眼大師滿山と中興し治ひ  
大神組君の神廟始て銘せしす中世及び絶多るを絶すこれら  
を興させし元弘六年新小高社を再建すし唐門拜殿河内權殿  
等も至るを悉く修造せし河内願を郡  
大相國家 台徳公 あり又正保二年卒して河内修管あり 河内代將軍  
左大臣家 大猷公 河内願を郡 此初社地六間余水乃山際河内





又より之及目乃所造替の時本社拜殿俱おままさく山やま邊へ引ひて修造  
 せしはなままのな本社を即今の拜殿の地ありといふ  
 新し宮みや社や唐たう朔しやく大だい燈とう籠ろう 總そう高こう六ろく尺じやく許を九く粒りゅうと銘なり  
しんみややせんのかねろうろう

奉治鑄

新宮御宝前 御燈爐一基

右志者爲二世悉地成就圓滿也

利益普及群類 矣

正應五年 壬辰 三月一日

願主鹿沼權三郎入道教阿

清原氏女白敬

大工常陸國三村六郎守季



續日本後紀云承和三年十二月授下野國從五位上  
 勲四等二荒神社正五位下  
 同八年四月奉授下野國正五位下勲四等二荒神正  
 五位上  
 同十五年八月廿八日授從四位下  
 文德實錄云天安元年十一月在下野國勲四等二荒  
 神充封戸一烟  
 三代實錄云貞觀元年正月廿七日授下野國從三位  
 勲四等二荒神社正三位  
 同七年十二月廿一日授從二位云  
 同十一年二月廿八日授正二位云

神寶 漆昇衣刀 韃毳卷 一腰 紗 切九 韃毳卷 一腰

技冊 珊瑚樹 一本 琵琶 絃五 簾 一面 水晶宝塔 一基

小山氏 禮令 小札 一領 拍古刀 三振

末社 金剛堂 慈覺堂 大黒天堂 十八王子社 毘沙門堂

山王社 阿弥陀堂

例祭 三月朔日二日なり年小依り町より遷物或を程云附系  
 等と出世色所り至時を二月廿七八日迄より遷物等かりひく  
 の戲藝を施し者曲と交し礼葬さぬく乃慈を法く二月朔日まで  
 町に成引渡し二日未明日新宮持殿乃前して毎町給り此を引  
 来り替り至藝を法く此并石町の方より毎歳恒例として奴城  
 出せり并石町稲荷町を乃并石町の役として妻奴赤奴と二日  
 立て装となり南并石町足被色とり日五色を分り法并雲渡尾



渡河を二月廿八日の未の刻より是河を三月朔日の午の刻より  
其物神人供奉し神楽を拜殿し其名有り翌二日神楽本宮へ渡河  
供奉の行列敷を初より行装を尋ね本宮此社改より古例の祭儀  
をとりて今神楽を旋以

新宮神楽の銘

銅細工比氣彦左衛門尉行久 沙弥正道 沙弥乘蓮  
野州小山大正持宝寺 願主佛藏坊能應

康應元己巳八月日

延年舞 此踏躑乃子を尚山乃日記に載るるを古実乃来由あり  
傳ふるに古意覺大匠吳邦より將來しゆふ秘曲乃舞あると嘉祥  
年中尚山の太早へ傳へ由ひく摩多羅神の神子此秘舞とて其以  
来毎祭臘月晦日乃夜より正月七日の朝を為行堂にて修正會と

稱する真秘の法儀を修飾の初日延年舞城奏し天下春年の  
法樂小傳しきりきり奉とて中興舞之舞覺大僧正の時大早  
と儀せしれ始る二月二日の神事に移されきりりのを修飾の  
敷山よりとも慈覺大師傳奉しゆふ舞あるゆゑ毎祭修正會は此  
を奏せしれしゆふ今を敷山よりきりきり尚山にのみ傳へ千古の  
是舞を修飾し終せしりきり秘曲乃舞ありとゆふ又四月十七日神  
樂の初も初宮の社前より此踏躑終りて渡河神事を始らるるに  
教是座主墳墓

濟宮別而大樂院境内庫裡乃是小塚有り佳古より傳へる教是座  
主此墓ありとて不潔と禁ト崇敬せしゆわとて近き所小勝道と  
人の墓あり佳古より小塚系の地よりきりきり奉ある處一勝道上人  
十才子の中小宅教是と道珍をよ且乃才子よりゆきりり道守若



の補陀洛山、跋渉の時、此處ありお隨ひ俗姓は附く上人と教  
是を徒牙あるより、仍く勝道上人を因祖して教は八箇山の始  
祖と稱し、第一世の所自職なり、社考は宇都宮公徳といふを教  
是を十八代乃孫なる由、成載され、是を據とする所あり、清道も  
教是も大中氏姓より、宇都宮の家を藤氏より、出く、葉田、白道  
兼公、四代の孫、宗國、成より、出く、教とお志し、宗徳より、公徳を  
た凡九代より、及、成を、是を系圖に、是を考する所あり、社考の説も  
誤せるなるを、

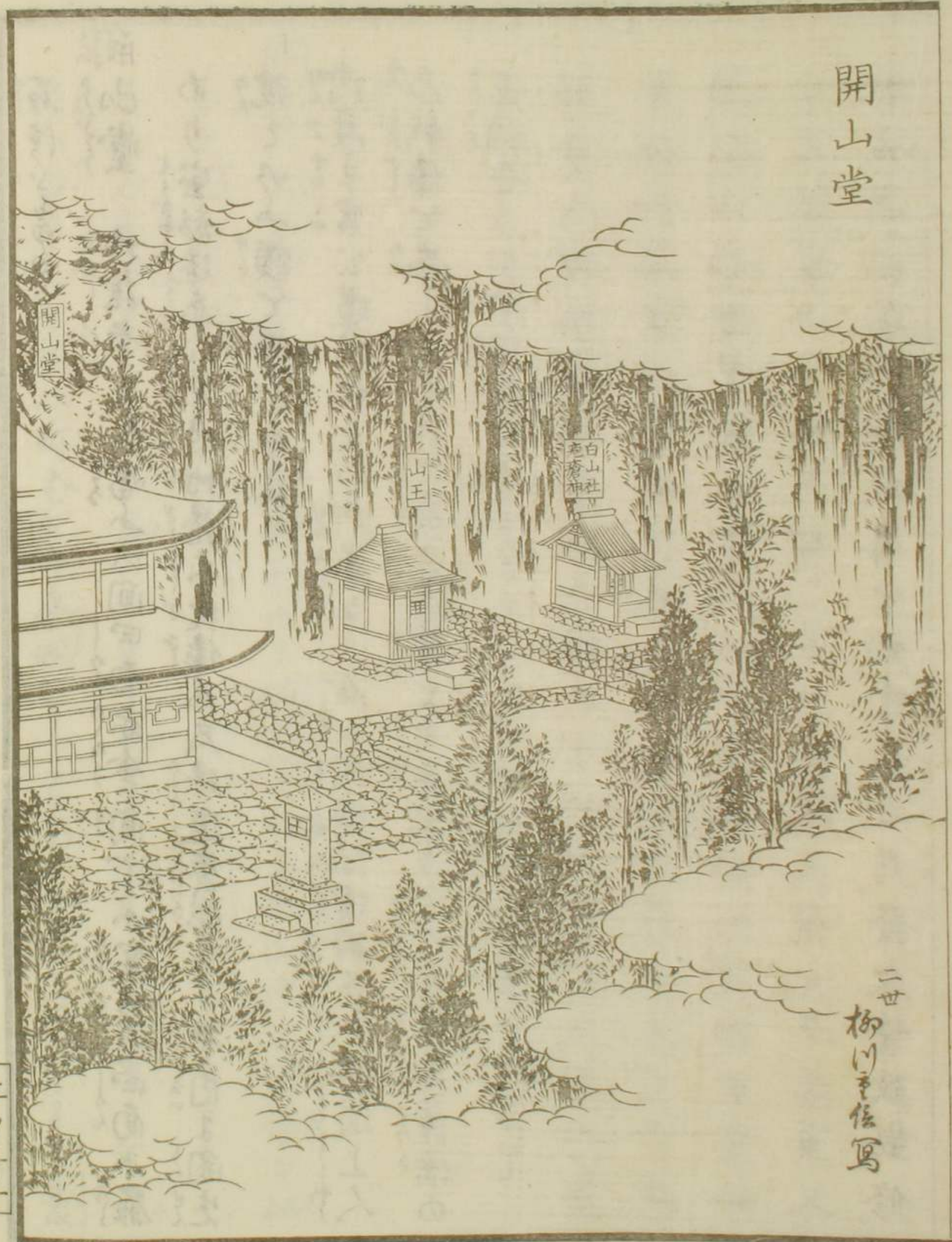
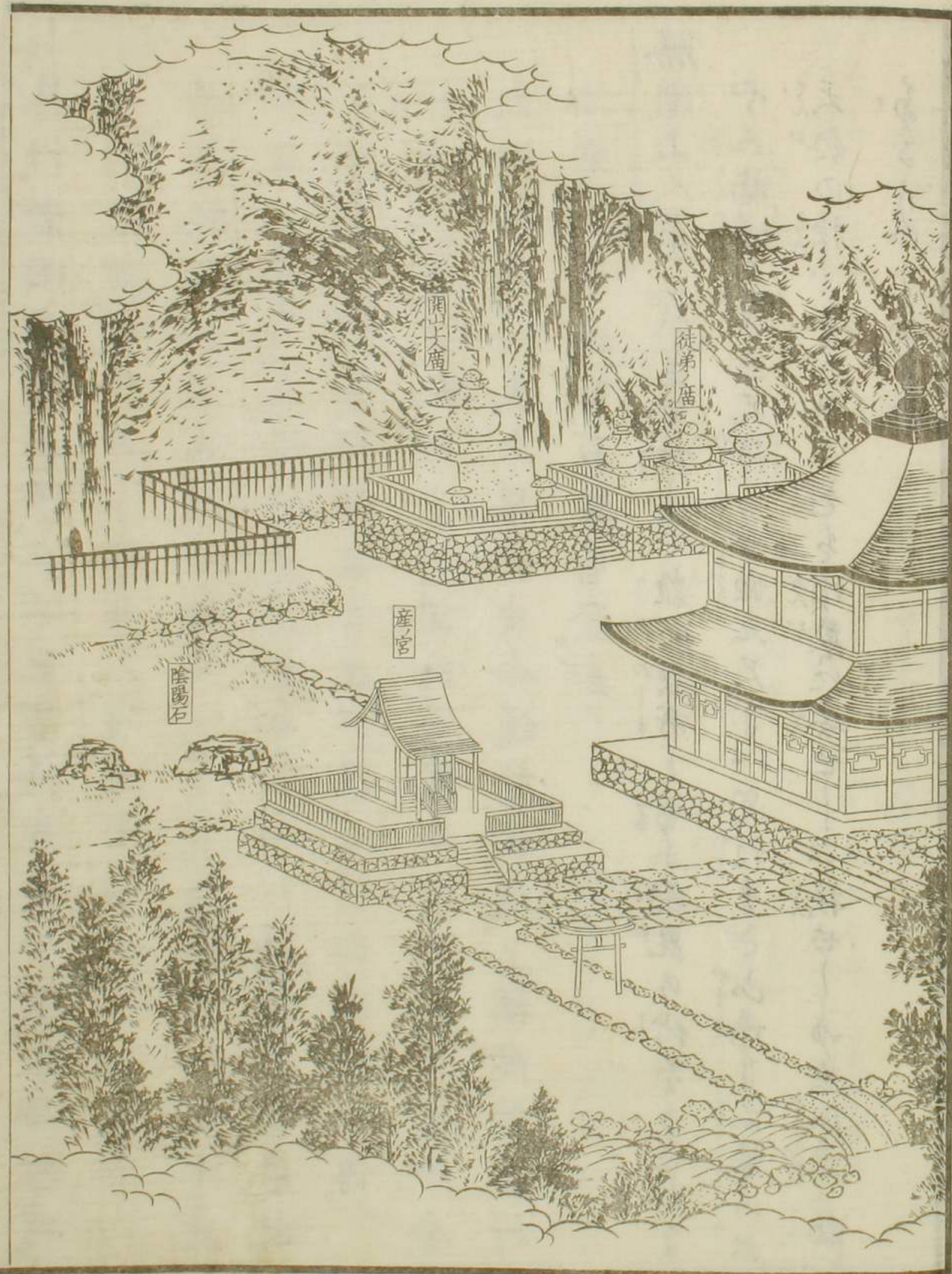
佛岩 東谷より、續き、寺院坊舎あり、佛岩といふを、山際、佛像は似  
ある岩、之に、お坐ひしが、古山崩して、往古の佛岩あり、せり、より、  
と、道とを、回くより、地乃名とを、成り、是より、淵尾への、本道とて、社  
考、成り、是を、凡八町むり、平坦より、と、漸く、登り、社考、成り、後

石法が、あり

開山堂 地蔵堂とを、唱ふ、六間、四面、赤雲、間ごと、小窓あり、四面、小扉  
あり、室形、造、東向、本尊、地蔵、本尊、像、六尺、許、運、成、能、あり、堂内、開先  
院といふ、願と、掲ぐ、あ、成、る

釈書云、釋勝道、姓若田氏、野之下州、芳賀郡人、早出塵  
累、鑽、仰、勝、業、州、有、補、陀、落、山、峰、巒、峻、峙、振、古、未、有、步、躋  
者、道、以、神、護、景、雲、元、年、四、月、企、跋、渉、路、險、雪、深、雲、霧、晦  
暝、不、能、登、止、山、腹、凡、經、三、七、日、而、還、天、應、元、年、孟、夏、又  
興、先、志、亦、屈、而、退、延、曆、之、始、季、春、之、月、發、大、誓、致、勤、修





開山堂

二世  
柳川重信寫



且曰。者回不到山頂。亦不至菩提。漸達于頂。衆峰環峙。四湖碧深。奇花異木。殆非人境。道堅誓所。遂悅目喜心。乃結蝸舍於西南隅。修懺又三七日。道雖究山區。未盡湖曲。三年之夏。造小舩。浮東湖。西南北湖。備極游蕩。就其勝處。建伽藍。曰神宮寺。居四載。道行與靈境並傳。桓武帝聞之。勅任上野講師。又於都賀郡。創華嚴精舍。大同二年。州界大旱。刺史令道祈雨。道上補陀落山行法雲。甘雨速降。百穀皆登。云

勝道上人墓 以道と稱して龍布畏所と唱ふ茶毘の地なるゆゑに  
やみ福塔を三尺并石玉垣九尺の一室籠まらば石像の六  
天部の換りきりなり是を墳墓に安せしむ換せしゆゑに福  
ありりのなるゆゑなり

白山社 天神社 經塔 十五堂 陰陽石

産宮 岡山堂の南にあり東向六尺社向附赤塗瓦葺減舎の  
その高欄大床造竊口を掲ぐ石玉垣と出づ社前小香居あり  
俗傳くは姫姫の女子安産成祈りしゆ秦のこまの形と傳り中  
小香車と出で社壇に初め進を奉返すと妙ありとて数多納免  
重くり出進免は乃以より乃俗習あり香車は向小奉進なる  
の謂也又社之南今ハ欄赤塗を以て大樂院のじり  
を蒼茫なる地なり是を 淨遷座前並一山を始の葬地とて  
こり小古び色小釈迦堂并往生院とて在り六依所と稱せし  
唐の回廊とり小池あり實は妙道院と淨光寺の條を合せし  
手掛石 縮着川あり大石なり

飯盛杉 此杉を以て古木たり枝葉皆地日密あり遠く望む時を



其形勢故とせしむるが如く見ゆるなり名附く

御神馬碑 是を養長六庚子年淡州國ヶ系河陣の時に被降る被為

石河勝利ありし河馬ゆゑ元和丙辰年 薨河乃翌年尚山紋ち

修ふといふ碑石瀧尾路の傍に有

御神馬之碑

此碑天守櫓二丁守余堂七丁を歴石二級  
碑文大内の上流神馬の遺蹟なり

慶長庚子歲於關原之御陣馭於此馬所擊於凶徒兵  
元和丙辰 大樹薨御明年放馬於此山歷於十有四  
歲寬永庚午歲斃於槽檻之間于嗟這馬也駿足千里  
初沛艾後款段非於其性令習而然乎所謂不立厩於  
寺厩於屠蒼狢猶守壘白澤復望門或人聞於馬之來  
由延寶六戊午歲樹碑於塚欲其名跡久不没也看者  
其致思焉 此碑を梶氏乃造立せられしものなり

河内門

此所を瀧尾總門なり素本造佛堂より左の方ハ 河宮奥の

院山乃懸崖高き十丈許瀧尾は古番所の邊へ傍き右の方を稻荷

川の流り老杉雜木路成掩ひ社殿より西を遙かして目色と

そと登夏の時といふも此境へ入道を凄凉くするゆゑかの法うり

畧々とする此神境を尚山第一乃堂地なり

下乘石柱 踏傍の左に建り

唐銅地藏尊 長二尺許庭像路傍の右にあり

山王社 向拜造前より居り

不動堂 本号二尺許二毫子より小運慶作あ道より石階六六十級

を登る坂中小鏡不動といふ石像一尺六寸許あり石像三尊赤

倉の石小祠あり又坂下に六重の石塔并熊野社あり

牛王橋 瀧の下流へ架掛し石橋を以て









得年



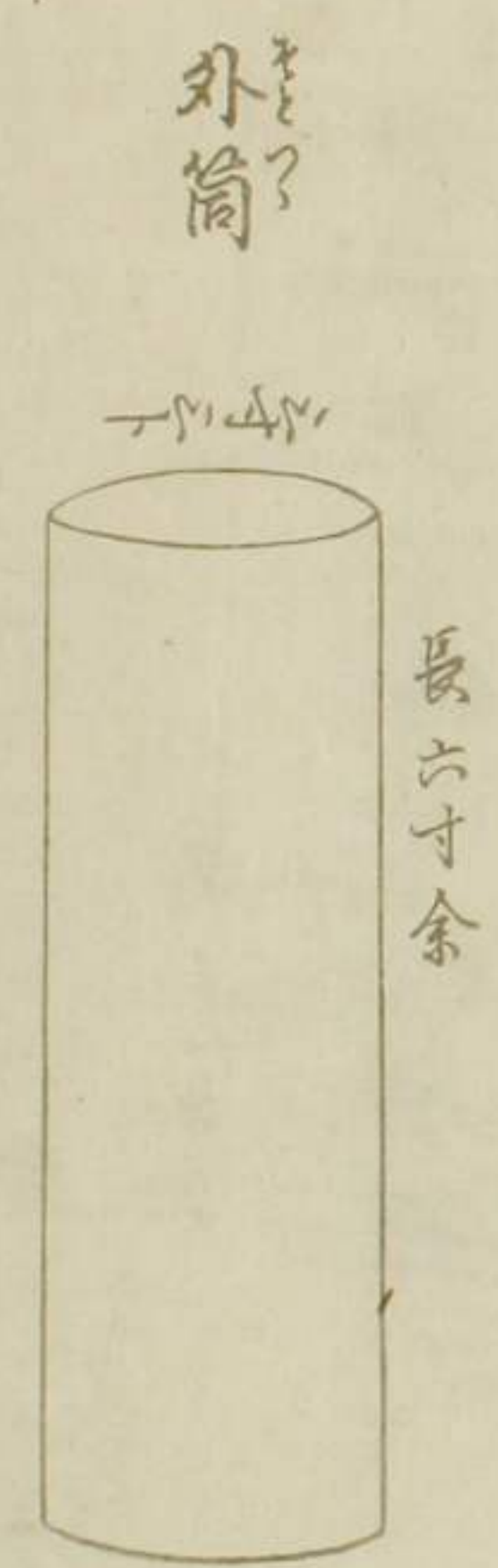
龍尾靈神影向之圖





あり公の傳は仍々今來下せり此所を我が臣所ありて此處に  
 女神の臺神のまかり此地は祝ひ多る處に我々して中禰守小安  
 臣せし先を末代を人法と守護せしむるに依り早て是を依  
 り中禰守小安め守り依りて尊皇乃告よりて修法し臺神の敵  
 向と傳りふに忽臺神化現しむるを頼天女の如く端正美濃金冠  
 櫻格を以て莊嚴の飾り其身扈從の侍女兼後を圍繞し侍僕左右  
 元満異香粉紅とて臺神出現乃尊密を拜し頼満具す即  
 唯上に社殿を造るて勅傳し守りて書頼頼し女體中宮と云く  
 道珍は室と附与し是より道珍を以て瀬尾上人の元祖と云  
 石鳥居 橋門乃廿間許と隔つ此所を梶氏建立あり  
 影向石 別所の西の方にあり上世女神神額向を弘法大師の傳  
 傳ひし石あり三尺は四尺許ある石あり

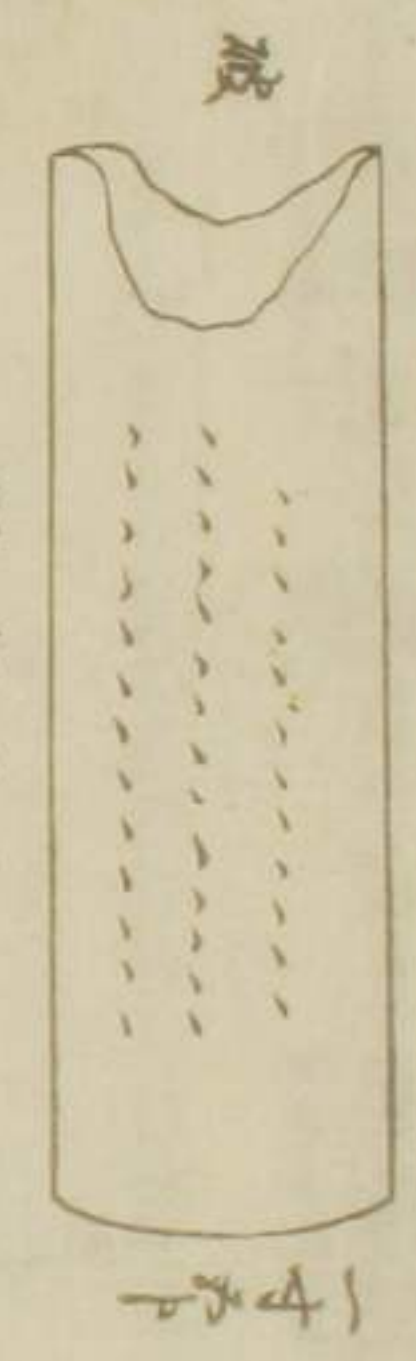
經筒 此銅器を文政六年九月別所の西乃方小敷向石あり是より  
 橋門乃遠く出る傍の石乃下より出現せしむるは性古を今の別  
 所の邊に社殿ありしが橋筋川度く乃洪水は山根を崩したる由也  
 正保二丙戌年鬼沙門堂公海大僧正行親よりて社殿造替の初此  
 古此別所の地へ社殿を引移しむるに旧社乃跡へ別所を曳造り  
 とす



銅筒は中より又經筒を納めあり是經筒は銘あり是を  
 外筒なり是銘は蓋小丸鏡よりて掩りありて別所より  
 重なる内何りの其鏡と奪ひとりし



内うちの經筒きやうづつ銅あはね減令めつき銘文なづか彫附おぼ中なかの經文紙きやうもんしを  
 案あはねの如ごとく文字もんじ初はつ過あす



銘文  
 下野國宇都宮住覺源

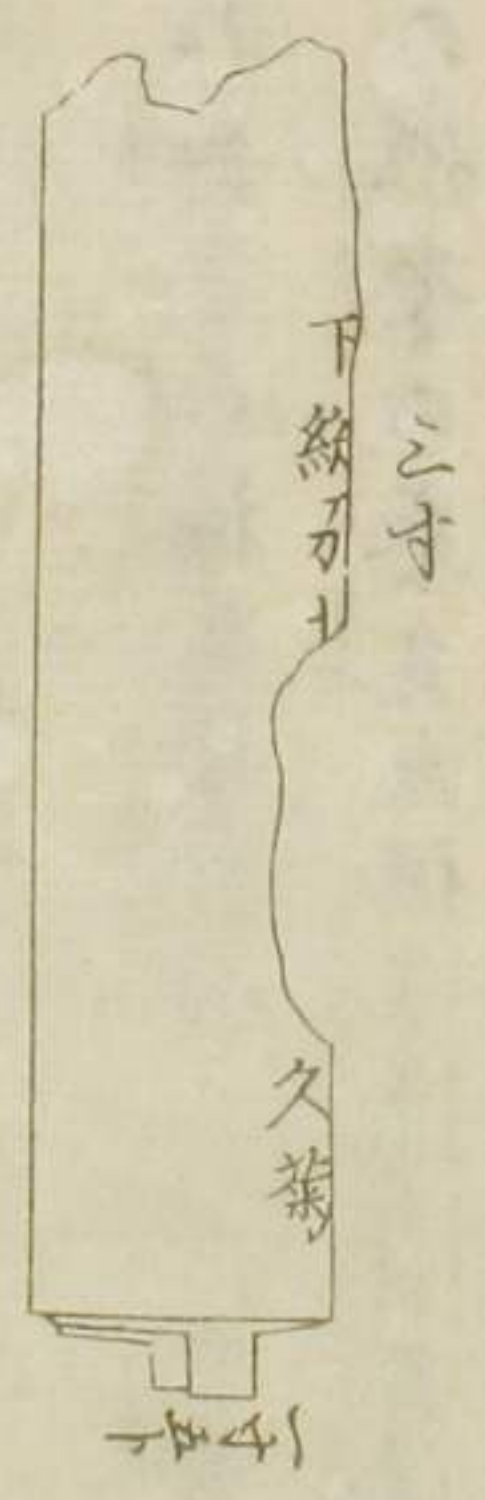
維利女且那般墜法印奉納

大乘妙典六十六部内

三十番神法政禪門

大永五年今月吉日

此經筒こゝのきやうづつ外筒そとづつを銅減令あはねめつき前の經筒まへのきやうづつと裝化まが同おな彫附おぼ  
 する文字もんじトコト



銘文  
 下総石北イトト王久菊

羅刹女且那下総國皆懸庄

松本民部少輔宗善

奉納大乘妙典六十六部内

三十番神大永雪月吉日

鐘撞堂 石寄居いしよりいの右みぎにあり趾あし礎いしを正保四年せいほしに鑄くわ成なりたり

二王樓門 銅あはね青赤塗あざな彩色彫物いろどなり二間にまは二間にま伴表ばんへに左捕ひだり右弼みぎ裏うら

に風雷かぜ乃なり二天にてんと安土あづち橋上はしの檐下えんに弘法こうぼう大師だいしの手書ての女に野の中宮なかつみやの

額がくを写うつし次つぎに出であり



拜殿

拜殿 拜殿之間は二間、瓦葺上葺外、赤塗、椽列、高欄付あり。

中門

中門 素木造、板葺、左右石玉垣、尖束、乃内、以尖椽、七裁あり。

本社

本社 巽向、拜殿二間、二間、大座、造三扉、瓦葺、減令、錦正、神の額、二面、

鯨口、三、掲、く、玉垣、乃内、を、丸小石、を、敷、く、り、総赤塗、向拜、造、彩色彫物、

高欄、二重、素木、方七八間、許、

祭神

祭神 田心姫命、の、高麗、本、地、河、所、佛、陀、佛、法、を、人、皇、六、十、代、

禮拜石

禮拜石 本社、乃、前、中門、乃内、は、長、三、尺、椽、横、二、尺、六、寸、許、の、平石、

巴里、に、手、指、尖、束、を、後、く、古、俗、の、一、名、を、助、石、と、し、日光、責、ふ、く、石、造、

せ、し、その、以、石、乃上、一、石、を、ひ、束、を、是、時、を、忽、蘇、生、す、と、い、し、り、俗、傳、を、れ、

を、用、ひ、し、り、

千手堂

千手堂 本社、乃、西、は、椽、葺、室、飛、造、二、間、四、面、瓦葺、本、堂、本、座、像、六、尺、

許、間、組、上、人、の、仇、堂、の、奉、立、を、但、り、法、中、免、海、河、周、索、創、建、也、と、い、し、

本地堂

本地堂 本社、より、西、乃、方、二、間、四、面、赤塗、椽、葺、佛、陀、觀、音、勢、至、乃、三、尺、

と、安、以、惠、心、僧、和、乃、作、を、り、

根本堂

根本堂 本社、の、西、は、あり、根本、日、滿、乃、本、地、と、し、弘、法、大、師、大、日、如、來、

と、手、刻、し、り、日、滿、椽、現、と、崇、め、修、ふ、と、い、し、

子種石

子種石 子種、大、椽、現、と、唱、ふ、本社、より、西、の、方、前、に、有、居、り、石、の、大、さ、

六、尺、二、七、尺、椽、若、む、し、り、巴里、凡、二、間、許、も、有、居、り、石、玉、垣、と、し、り、

と、園、を、中、子、を、其、の、池、石、は、新、造、を、必、定、勅、給、有、り、と、ぞ、

酒乃泉

酒乃泉 本、名、を、切、徳、池、と、し、り、池、中、に、辨、天、の、石、小、祠、を、安、し、性、古、泉、塔、

と、を、い、し、り、由、徑、六、七、尺、有、り、小、渠、有、り、九、尺、小、一、間、許、有、り、埒、垣、を、也、

ら、以、或、説、は、古、以、池、中、より、酒、涌、出、く、り、り、名、附、と、を、い、し、り、

三拾番神堂

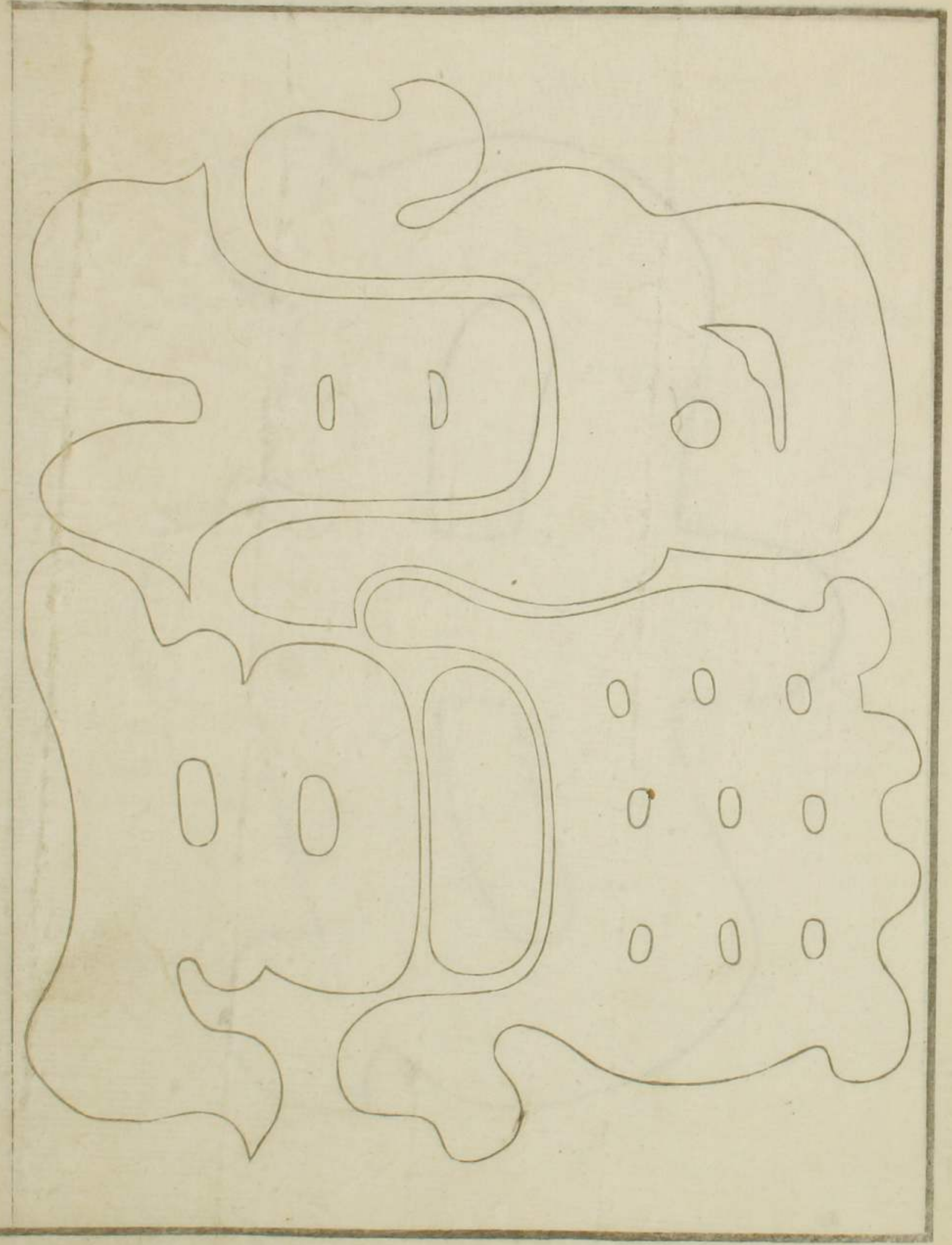
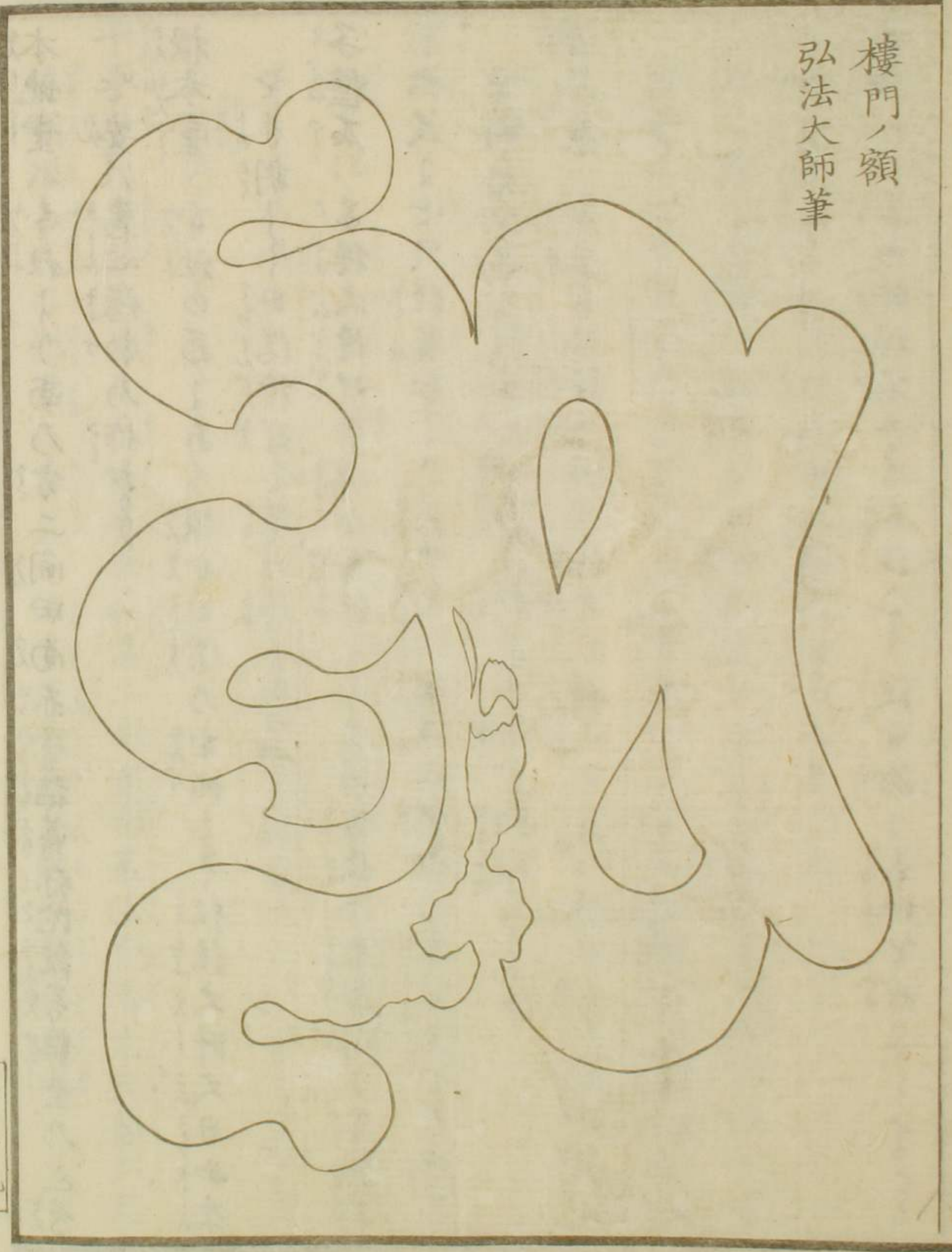
三拾番神堂 四、尺、社、赤塗、鉄、塔、の、並、り、有、り、

二本杉

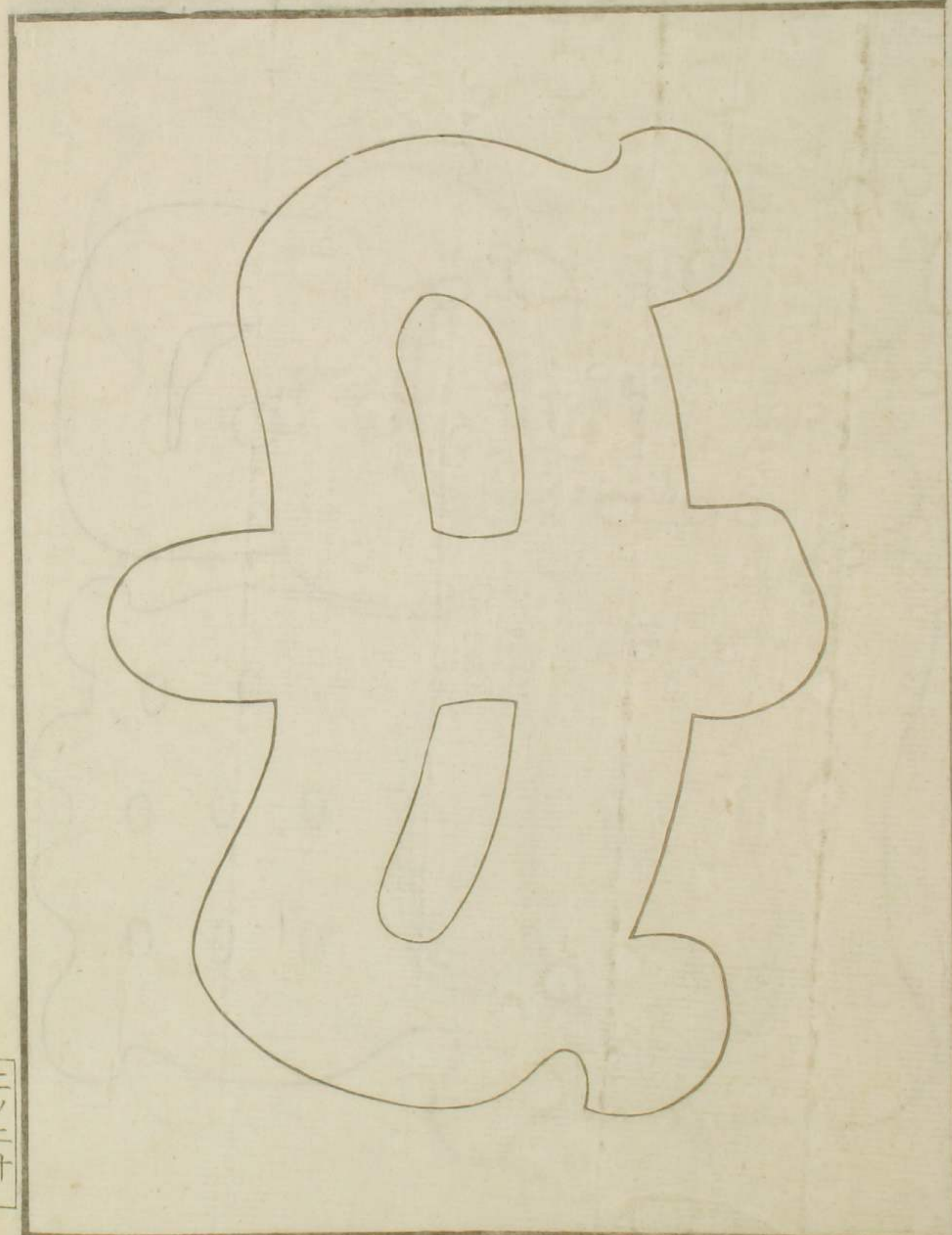
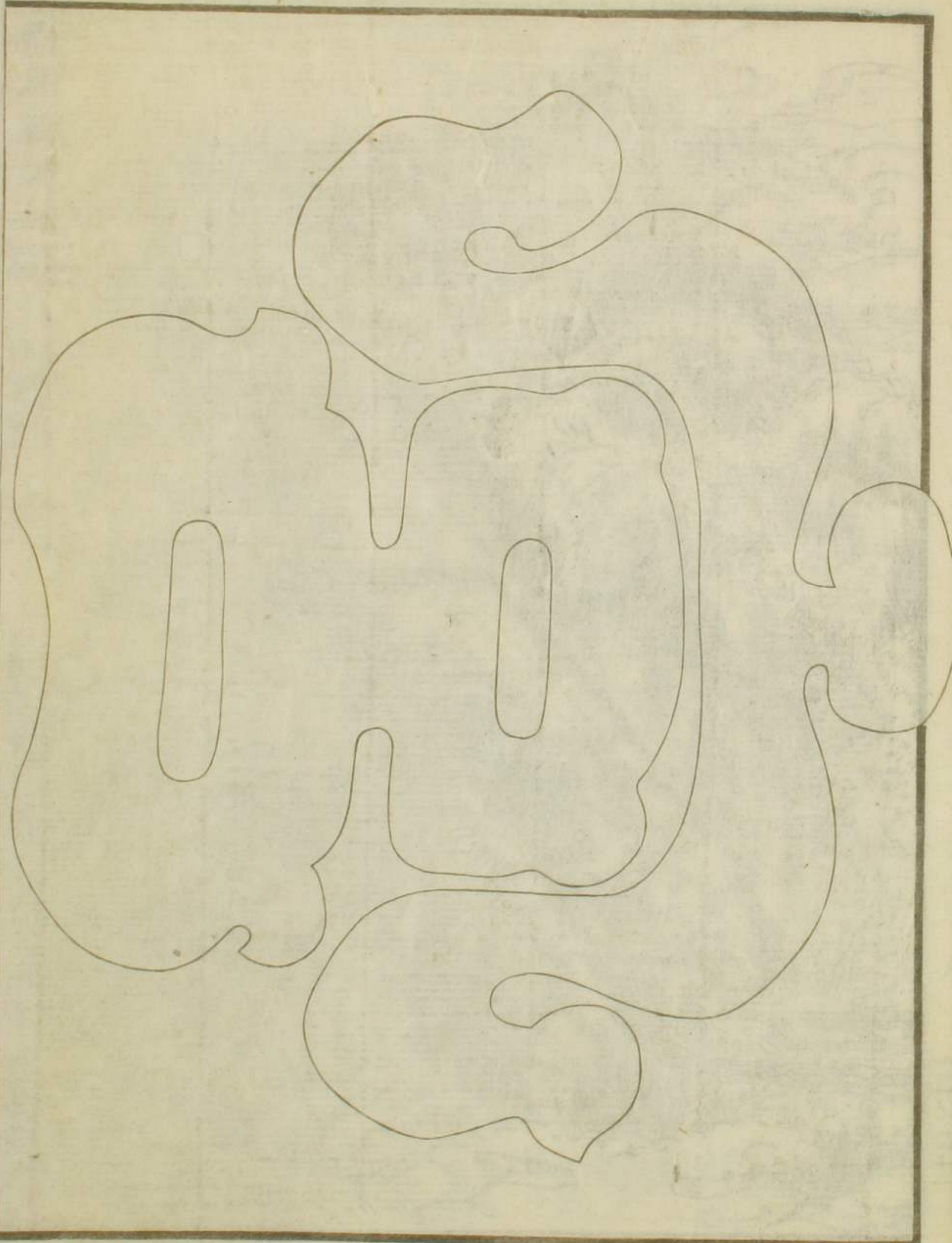
二本杉 奥、の、院、神、木、を、り、本社、より、後、日、當、り、玉、垣、を、也、し、り、と、し、り、



樓門ノ額  
弘法大師筆





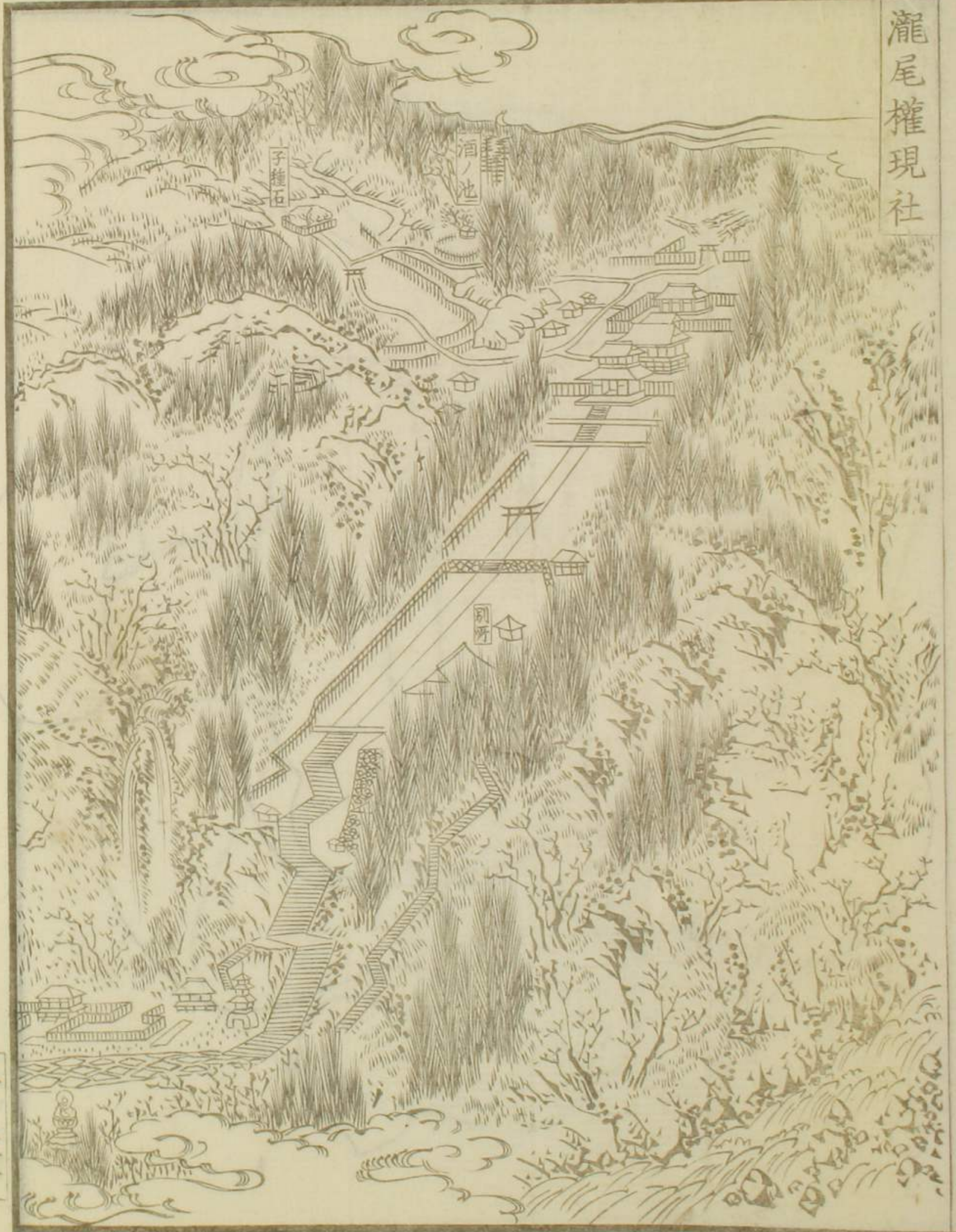


三ノ三十





瀧尾權現社





七間入の辰已向く前に有る石あり玉垣の内は藤原三百と号  
する石あり石枕籠一臺此石を龍尾権現出現し給ひ地ことり  
碑石 龍尾権現乃靈異ある事と銘せし碑あり又昔むくする長三  
尺程乃石あり障利三百大荒神と唱ふ其大略を寛文七年四月  
大猷公十七周 所忌の初法華万部會所執行台院群衆山の精  
院山樂法平此奴僕龍尾に來りて三本杉を見て大に怪し  
てゆふ蓋て開しよりも言大なるに中なる杉を疎にせられ  
おどひひて不殺せし初を其言いさごとをそとふ依り後背より  
懸して心身悩れせし由念會に降られを偏に粗人乃如く擔  
て止す或をゆふ神來り我を眠せしとこそりこく奮ひとる  
たるゆゑ同業等是利灵神の崇敬あると成ありと台山乃靜  
光院覺深法平に祈禳を祈ひて是を深所加持禱呪讀經する事  
二ノ二十二

日及々 浙威臺退去し々依主時深所祈狀神候と恭記し事實と  
輝祿せしことごとくも言辭志詳なるのゆゑ臺祀乃一奇事  
天聽に達し臺祀記一卷と奏し奉進する出と何れ宝永三年六月水  
府の館塾ある表為極の編書し々雕する碑あり其銘文は略を  
鎮火祭 所宮の社家二篇の持とし々尚社乃子と司且毎菜正月朔  
且未のより 所宮所儀式有由也 所宮より宿所へ向りまより尚  
社持礼に來る由也必屯其昏過たり控るし先多路社家不化て來り  
答意に達ける由也其以來八実の社家ありと名を松系を以て櫛す  
と心し是を路ゆふしと名附し由里俗の傳ふいひ傳ふ  
念橋 三本杉へ至る橋せりふ  
妙覺橋 子種石の方へ通ふ橋なり  
等覺橋 右同所より下向道の橋なり各石の小橋



多寶瑛塔 本社の左の方小有り堂一間四面内小瑛塔と瑛塔内  
羽像乃普賢と安す其扉裏漆銘文並鳥を次に出せり

寶物

佛舍利 一粒宝塔入 弘法大師書六字名號一幅

大錫杖 一本 建久三年三月十日筑紫阿弥陀上人寄納

龍尾建立記 一軸 勝道上人遺弟道珍僧都書

石劍 金襴帶入 一振 右刀 三振

般若面 天正十二年四月大島丹後守宗久寄納

定順作面 永祿三年清原德春寄納

阿弥陀經 一卷 百廿行 伏見帝御宸筆

化城除品 一卷 二百廿行 後伏見帝御宸筆

不輕品 一卷 百廿八行 後醍醐帝御宸筆

御手篋 安貞二年平朝臣助永寄納

尺鶴之面 右御手篋の内より

翁面 右同

右劔左劔不動尊 二幅 弘法大師筆

般若心經 單書 右同筆

不動尊 木立像二尺許 右同作

毘沙門天 木同 右同作

三尊阿弥陀 惠心僧都作

此等室物教多まれど枚挙すべし不遑ゆ

筋違橋 此石を境地乃限りて是より下向遠なり此橋を御用水路

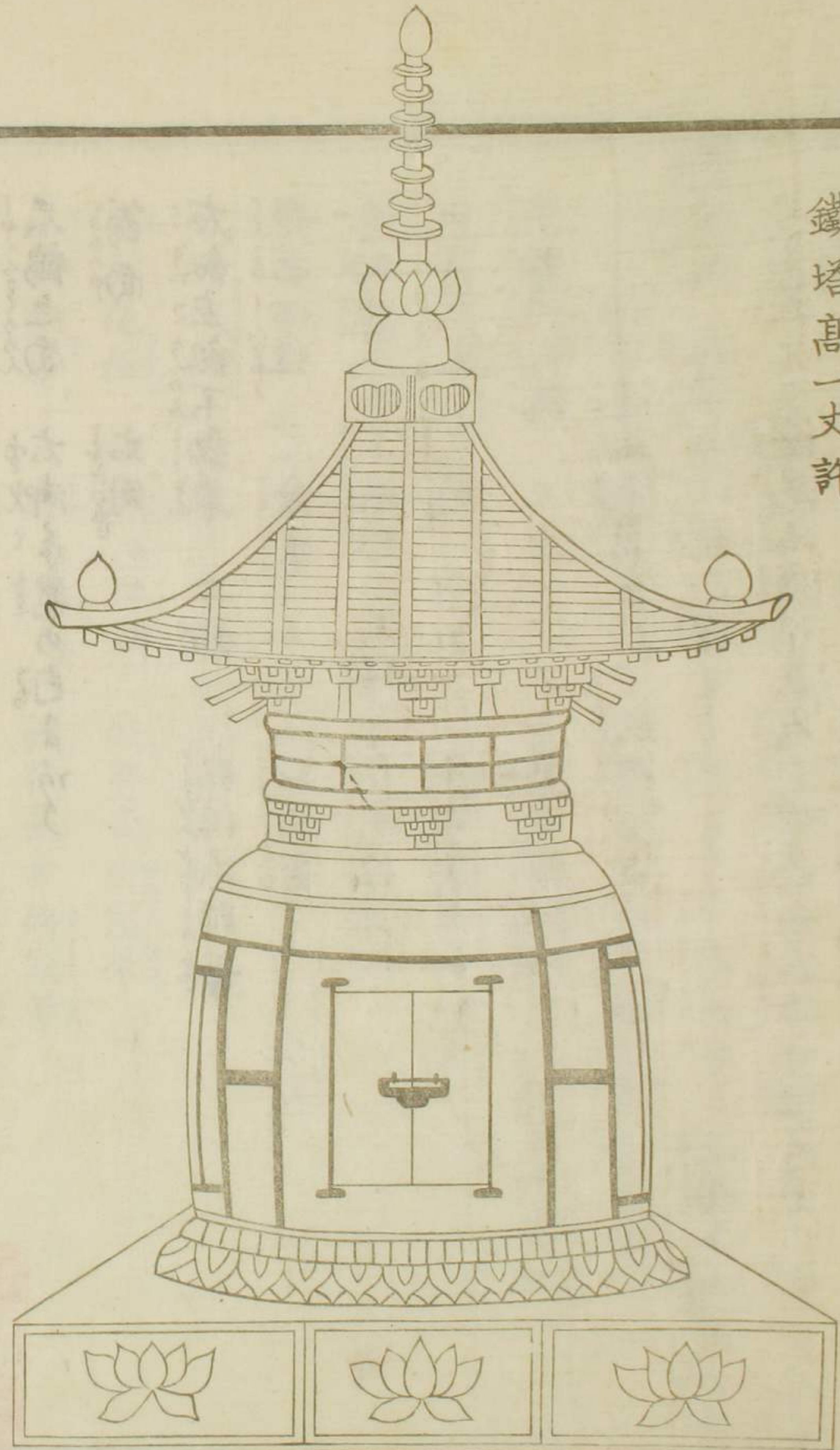
りて是より龍尾入口ゆゑ大小便其餘不潔と禁はるの方石雁木

と中道を行者堂乃前より此行老堂造の山より白糸瀧の上なる

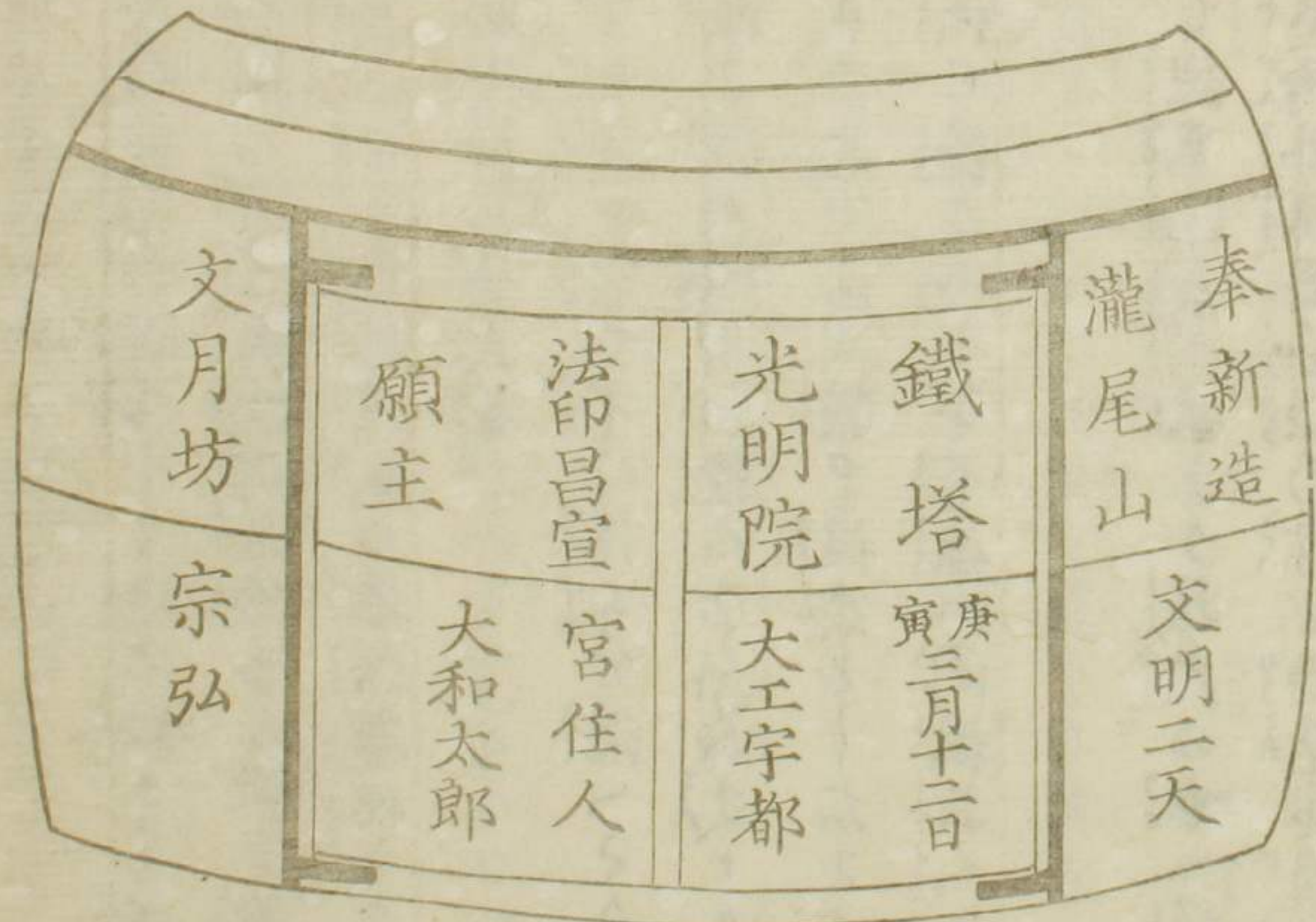




鐵塔高一丈許



鐵塔ノ脇ニ銘アリ





巖を古くは阿弥庵と号すと云ふ

行者堂 此堂の造りより奉々修修の禪頂する道の始なり路より

も東乃方より西番所なり是を 新宮奥院河内續きられを其警備

乃乃重なる行者堂本宮波小角并前鬼後鬼の像運慶化あり是を

りもの方石雁本敷百歩と下りて臺あり

薬師靈水 石坂路乃山原は水盤と臺て中に清水を湛とく眼疾

と患ふその水臺水を眼は濡る時を初夜なりと云ふ又より少坂

路を仰て道の中に臺有り堂内と二尺通り柱束とく右は壇と波

て茶陣を安ん左は縁と張て籠り水とを学像ハ開祖上人の作

て臺像の学像ありと云ふ

地藏岩 龍尾下向道と出て龍光院表門前より新文の方へ坂路成

下る左乃方より 河内屋河外攝高石垣乃像は是を鼻祖道公

神護景雲元年四月二荒乃絶頂は攀跡と企く此所小来りなり

岩上に学像ありなり上人と懸塗くく下りたり或は地藏新向石

とを稱し此岩乃例は地藏石と稱する碑石を建たり控る小延室

年中河部空烟の墳墓を河内園の内へ造る一此地藏岩の南にあり

程近きゆ急河部家より石座像の二尺程ある地藏を造り此石上

小安重也仍く古人傳稱して空烟地藏と唱ふ亦彼家より常夜燈

乃石燈爐を傍に造る云

慈惠大師堂 新宮社北乃後山の上小あり修く時寛永十七庚辰年

天海大僧正

河内家若君河内誕生乃河内願とく大僧正を造りて獨を曳く道

堂河内建之より南向の殿堂内と二分なりとく中の間正南一丈四方

水の方小須弥壇と波大師の古刹と安ん 東の間七尺通

石像あり



須弥壇と構へ正南の羽目板は將軍地蔵并に圓画し西の間にありて  
壇と構へく正南は大天狗左に設行者右の方に半瓦九西の羽目  
板を八天狗東の羽目と大師の空容并二童子右各繪而了極法  
橋の等あり本堂乃有田間余去る前殿と後く田間大僧正天海清菴  
雨とを于時寛永十八年七月下旬の改より  
若君清誕生の清祈禱とく本堂中央は行法壇を建て大僧正慈  
惠供所執仍同左右は壇を設く尚山乃泉流并東殿より供所乃  
徒各代り慈惠供所執仍有り本堂前殿の両間中際を柴燒壇と  
て一坊八十口獲て修行の伏法螺貝の密密供養四乃書き山上山  
下に通徹を大僧正を新宮并  
東照宮の清祈禱中に福抽藝丹精誠給ふ清祈禱中 上使こく  
中根氏登山同八月二日

若君清誕生清祝乃 上使宮崎氏也山せし清祈禱中種く靈威  
の奇瑞あり奉を大師清傳記等に詳なり主後持殿を相除これ今  
本堂の之清堂内は天物の繪像あり成を天物堂と唱ふ清堂の  
北を 清宮續の山と由名平乃のり糸流ありと  
常行堂 清靈屋二重清門前南の方より行法每の二堂お双び東乃  
方なるハ乃り堂西の方なるハ法華堂あり桐蔭二重岳木赤塗欄  
間彫物彩色十間又二間は本堂のりひごと山とせこれハ慈眼堂  
と云ふ也と本堂より西行すべき設は歩廊を設せり堂内本堂ハ空  
冠の阿弥陀左右に曰菩薩と後の方に摩多羅神を安んじ堂を  
嘉祥年中慈覺大師始り堂山せられ敷山は摸して本堂親建し  
此ハ此時天台一派を興され顯密繁盛となり大師山門より隨從  
せし僧侶十余輩を涉り留りて是又久後乃徒を合せく二十六人



の内廿四人を法華三昧の修儀を修せ又十二人を常行三昧の儀を修せ之を急務修せし由是種會右大將家由伝作有て右方乃三昧修行乃燈油料としく文治二年九月同國宮河郡より十六町の地を市寄附有しり東鑑小見えく中より右府実朝公も由伝作有て右將軍家より水晶乃法名珠などをもて堂内へ納りし中を在りてより於於堂と名別稱せしとぞ然るに元和三年四月東照宮神靈御遷座由右宮殿所營造乃地形を曳移し時二王御門前の大杉の下より一箇の桐葉を垣移り大僧正より有りて是を奇異の表ひを有りし蓋を免る中を免るは瑠璃壺有り是れ於々々の清骨あるべし古記に其中を採りし也之れ 清宮別當元祖大樂院行惠法下へ献進りし後二世惠海法下の時毘沙門堂公海僧正の命より被瑠璃壺を挾り宝塔に造籠て常行三昧堂と

納りしと云ふ

法華堂 常行堂の西に双べり之間六間小四間并起立并造梁のりも亦は同く本尊普賢并蓮花母神十羅刹三十番并後堂に傳教大師の親像右大師書写の妙典一巻納りしと云ふ

御靈屋

御三代將軍家の清廟なり慶安四年四月廿日  
 御薨逝儀 御遺命 清靈柩當山へ入清し終ふ 清尊温奉稱  
 大猷院殿清別當所を龍光院二王御門より西北あり  
 二王御門 本向 清手洗屋 二王御門内 清地爐 清密庫 仁王御門  
 二天御門 清類の 夜叉御門 二天御門より 鐘樓 鼓樓 二天御門内  
 御唐門 清類の 押印あり  
 御本殿 御拜殿 皇嘉御門 清奥院の 御奥院 清本殿より西の方



河部空相墓碑

二王河内郡清和院の西方の河部外又と外は相模  
河部外又と外は相模河内郡清和院の西方の河部外又と外は相模

是を従臣下行侍従兼豊後守河部朝臣忠秋乃墓あり播磨守正  
勝の二男左馬助正吉の息男あり慶長十六年此に若年の時より  
若君に附させられ後に豊後守忠秋と中せり以中身をたれり風  
夜恪勤靡らむ元和九年十二月叙爵し河一字拜領し寛永元年正  
月父が遺命し我下死と命せ賜ふ同二年二月河加恩の地を賜ふ  
同三年又所領と賜ふ同十四年正月下野國壬生城と賜ふ同十六  
年正月武藏國忍城と移り享安二年九月六日  
大徳言家西城と移らせ給ひ忠秋と宿を穢し補せり同八年八  
月侍従に任じ寛文三年二月所領と加ふ賜ふ同十一年六月廿六日  
致仕し延宝三年六月三日逝せり法益透玄院天國空相大居士位

牌號光院と純ひ碑の空相の二字の形附し近奉此塔の石に  
て覆ひと造り上は屋根の形あり銘あり之尺許四方を一寸四寸  
宛前正面と窓の如く彫りし二字の足ゆゑやうと造り致  
仕せり時より

將軍家へ遺て有願重なるゆゑ嫡子兼家長等小令し我没せしを  
らるゝを 河部外近奉と捨しと造らせし由仍て河部外近奉と  
埋葬せしむ此人乃碑あり二王河内郡清和院の西方の河部外又と外は相模  
墳墓の河部外近奉と河部外近奉と河部外近奉と河部外近奉と河部外近奉と  
ても奉仕せしむき宿願ありとゆふ  
梶氏墳墓 河部外近奉とあり  
従臣下左兵衛督源朝臣定良の墓あり此人と  
大猷公へ奉仕し莫大に河部外近奉とあり 河部外近奉の初殉死も河部外



と於思惟と云々 河原前には生瀧寺住 河原前小教寺住  
と有教河原前住と云々 河原前住と云々 河原前住と云々  
と給り有る事 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事  
孫の後業をかりし事 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事  
福十一一年六月十四日 福十一一年六月十四日 福十一一年六月十四日  
是終身の志願なりと云々 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事  
の絶倫なり 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事  
り 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事  
を人傳へし事 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事  
事 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事  
と云々 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事 河原前住に在りし事

去清佐源朝臣宣良照光院月嶺園心大居士と云々に刻し右の方  
み元禄十一戌寅とあり左の方に六月十日と瀧寺蓮座石下二  
階の卷石あり廬曰桓九彫板膏おて 廣前小石香煙花瓶水盂石燈  
籠墓碑の巴里と石玉垣あり曰色に柵と云々 本戸門あり柵あり  
み石楠お松杉栂の大樹有碑記を墓石の左乃方にあり其人乃行  
状傳河原前住とも長文ゆゑ悉く略す  
左兵衛督梶君之碑  
從五位下守大學頭林衡撰  
故從四位下。左兵衛督梶君者。長島城主。織部正菅  
沼氏臣同族。某之子。爲亞父梶君某所養。而冒其姓。  
其仕當寬永正保之間。以忠誠慤謹。彌於一時。  
大猷大君。使其常侍左右。雖在後庭中。亦必從焉。



大君馱代遺命葬于野州二荒山君扈從靈柩  
遂留家焉自是四十七年每且拜廟不以祁寒暑  
雨廢云君諱定良晚號左入居士初為亞父之義子  
既而亞父生親子乃讓為嗣有旨特賜俸米二百  
苞為小從人寬永中累增俸至六百石擢小納戶  
嚴有大君時叙從五位下增俸至千石常憲大君  
時進從四位下又增祿至二千石兩朝眷注之渥  
○恩賚荐臻時召抵廷中而君堅持宿志以終  
身焉君在野州鷄鳴初起澡浴戒潔辨色詣廟獨  
坐殿前俯仰齋慄儼如事存方冬春之交立干凍風  
寒雪之中輒至於體僵口噤不已年八十五稍衰始  
用轎來還然入廟門未嘗杖焉君恒言身被君

恩銘骨浹髓雖老矣而日侍于廟是可以償素志  
耳言終欷歔以元祿十一年五月十四日病卒于野  
州之第距其生慶長十七年享壽八十又七葬之  
大猷大君塋域之後蓋成其志也水戶義公為文祭  
之云曾聞孝子廬親墓者未覩忠臣廬君墓者乃今  
於居士乎見之君幼而慧七歲能騎十一能銳十七  
講兵法其決意辭為後於亞父年纔十九焉比長不  
喜聲色不求溫飽奉已極儉朴而至購良弓駿馬則  
不惜千金恬于勢利謙卑自牧爵至四位不以自崇  
每與朝士立輒避下位祿至二千石不以自封而  
振救施與乃以為樂寬文之水患貞享之火殃請賑  
濟於官野州之民賴以全活者居多君畢生不娶



遂絶繼嗣。其意謂一委質為臣。臨緩急而顧家累非夫也。雖曰非中道。而其所以報國之意。則有足多焉者。嗚呼。四十七年之久。而詣拜廟殿者。未嘗有一日怠焉。自非忠之盡而誠之至。孰能如是乎。小野良久者。嘗得事君。而其曾孫良純。今列朝士。官于野州。獨悲君墓無碑記。而謀伐石。刻銘。遙屬筆于余。今也距其卒已百年矣。而得良純而始傳。是君雖無後。而猶有後也。良純之此舉。不亦善乎。余樂為之叙。以係銘辭曰。間氣所鍾。百夫之特。維誠維忠。克敬臣職。出處終始。一厥德。生事死事。咸不忒。懋哉駿功。允足勒輦貞珉。表兆域。石雖泐。而名弗泐。英魄靈爽。罔終極。長在乎

荒山之側。

寛政九年歲次丁巳五月

杉浦吉統書

小野良純書

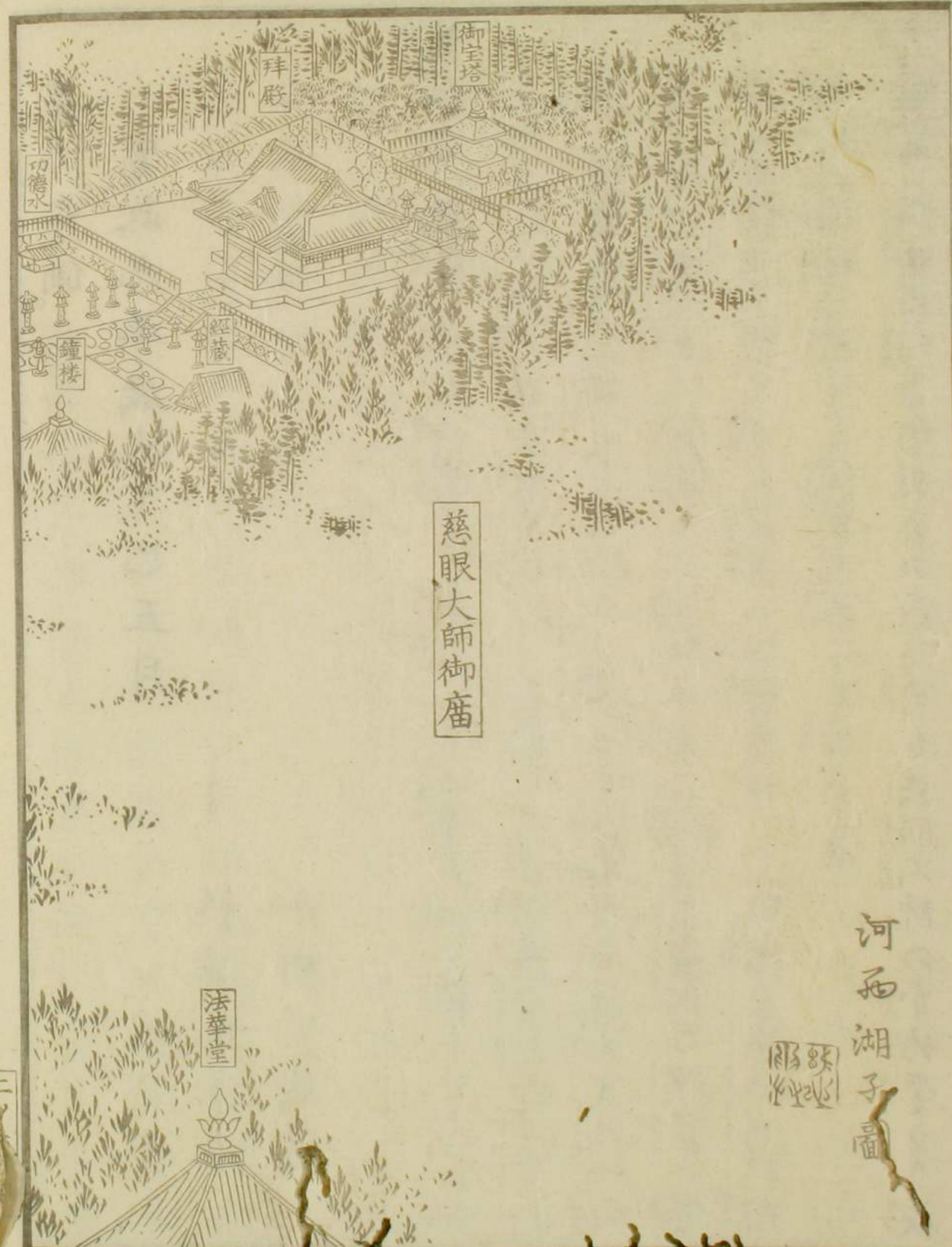
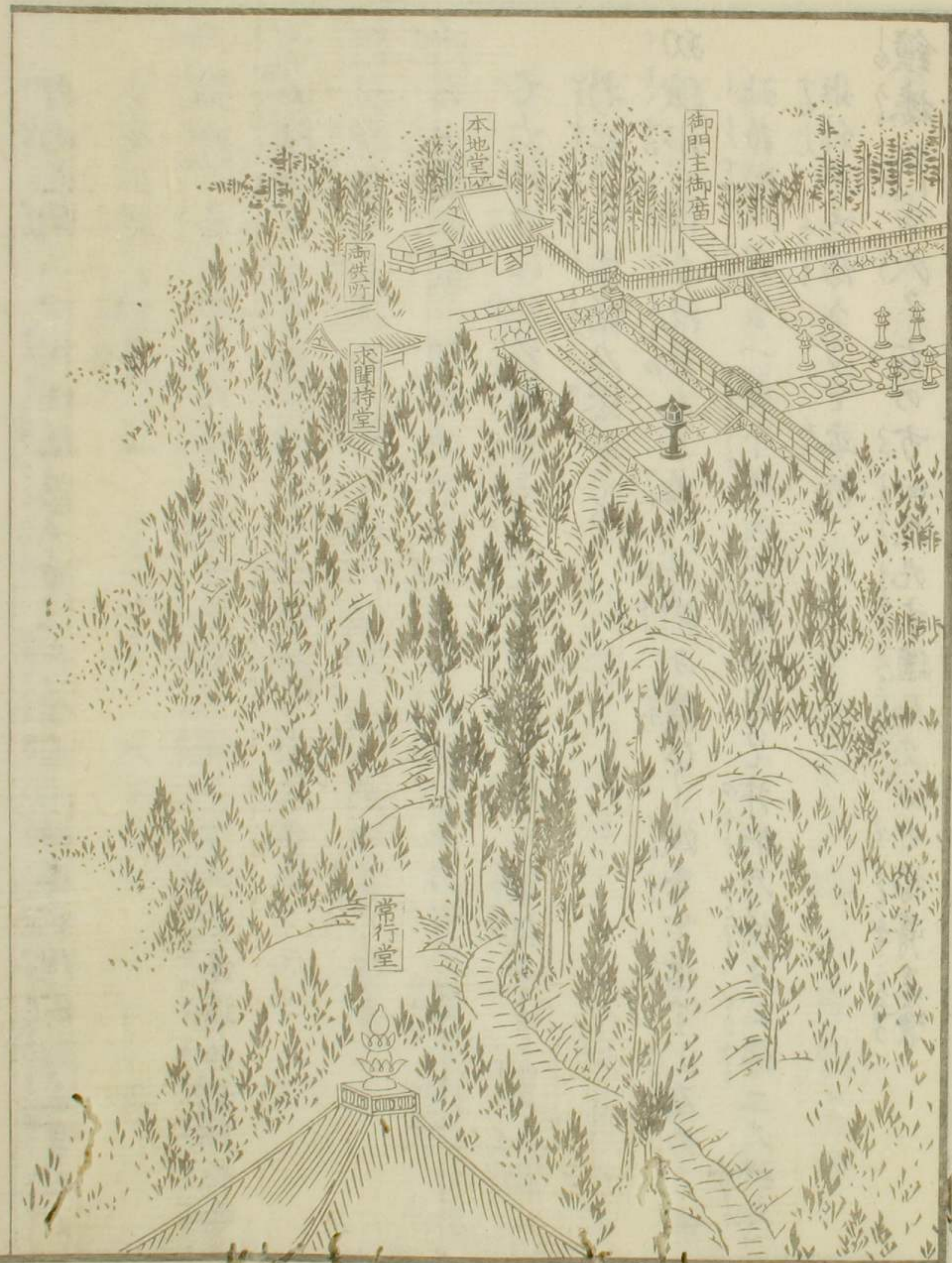
慈眼堂 慈眼大師の法席を古より以て乃山と稱して之を乃山と唱へしは別所を無量院とて山麓にあり法華常行乃二堂乃間は歩廊の傍を設け其下を運りて山路の石橋本と凡一町半程あり左の方に宝庫あり石階の邊に大なる唐銅の燈籠一基あり之を銘す右に折る石階之間程をゆくと堂を入口此門を左右圍垣を以て修殿を凡十三間をあり

文殊堂

入口の門より西南あり

是を慈眼大師の本堂なり





慈眼大師御廟

河西湖子圖

那歌



卯向之間小田間從揚茲赤塗二宅當本向拜緣側附前扉是塗在  
とをに揚茲羽尊

法供所 本地堂小相接以向を同前二間小七間素本造緣側附板尊

求聞持堂 本号虚空藏を法供所の南にあり

阿弥陀堂 石像乃三尊を安ん門と入る左の方にあり

淨理主宮淨廟 阿弥陀堂の後より石階を西乃方一宅に淨門と入

て右に方に礼拜する其の方石垣を高く築揚する上三方

折也一淨室塔九基とあり

功渡水 石手洗井を乃に井桁小覆ひ一汲奉を禁す上層あり曰

止持殿一宅の一階下の左乃方小阿彌井桁乃傍より石像二尺許あり

水林乃三像ありを安ん

鐘樓 門と入る右の方曰板九本造凡火四方椽葺是塗

慈眼大師鐘銘 并序

日光山台教中興天海尊者慈眼大師之靈廟者由  
征夷大將軍從一位左相府源朝臣家光公之鈞命而  
所建營也額茲梵室曰顯正院矣弟子公海欲謝師德  
鎔鑄華鯨以備晨昏之驚覺焉伏冀天下清寧庶民安  
泰佛典廣敷群靈均益云爾銘曰

日光靈岨 勝景偉々 山川幽谷 殆摸月氏 三佛並塔  
衆神列移 巍々金殿 堂々畫棟 中興祖廟 德海無涯  
摧邪顯正 以之名師 金鑄捷地 掛在高樞 搖動一擊  
聲利甚丕 遐益三界 通覺四維 折伏魔外 彈破鬼魑  
屬膩消劍 唐主脫罹 君臣如意 國家平夷 佛乘弘揚  
永々福禧



昔慶安元年戊子卯月二日 日光山貫長兼東叡山二世毘沙門堂公海造

經藏 棟檼と相並相背朱塗二間之間向拜縁側附扉墨塗西向一切

經内外典籍と安す

地主神社 正一位稻荷社あり拜殿より水の方にあり

拜殿 向拜附八棟造巳午向羽背朱塗二重垂木六間之間前縁

の扉墨塗縁は成掲ぐ巴里縁側階段六級四方揚幕内ハ皆簷を掛

あり丸柱朱塗上弁の長押上巻り合欄巻組との総彩色あり丸

の内にて引の紋を花を大扉の窓紋なる由之浦棠より出づ此

れを左も右も一此拜殿乃北形方拾間余庭中北四角皆栗石を敷

石玉垣あり石階六七級上より拜殿前を敷石十四六間あり毎歳

十月朔日を市連夜備儀あり二日を市正當日より一山の総出仕

法華八條を修行せしむ

石枕籠 門より拜殿へあり敷石の左右あり

紀州瓦 水府瓦皆二重宛左右に相並を敷く石井大橋寺納瓦

も二重お墨瓦を敷く後寺宇次門大寺以一重宛を敷く松平正徳

寺納一重瓦の方よりあり又左の方を秋先留朝吉田賢宗各一重

宛寺号の正保元年門二年の銘あり

浄廟前 石より階上廿一節草四ツ尺方寸三寸幅一尺左右

寸三寸幅乃花瓶あり瓦も皆石より造る草上に香燈獅子を安ん

じ瓦も皆石より造る外は石枕籠二重あり

市寶塔 正統石方凡九尺方室塔乃也に六天部の石像各四尺六

六寸幅ありと安す梵天帝釈持國廣目增長多門乃至像あり其日

方石乃玉垣乃下を四角石の字築地寸四尺徑の上より石玉垣あり



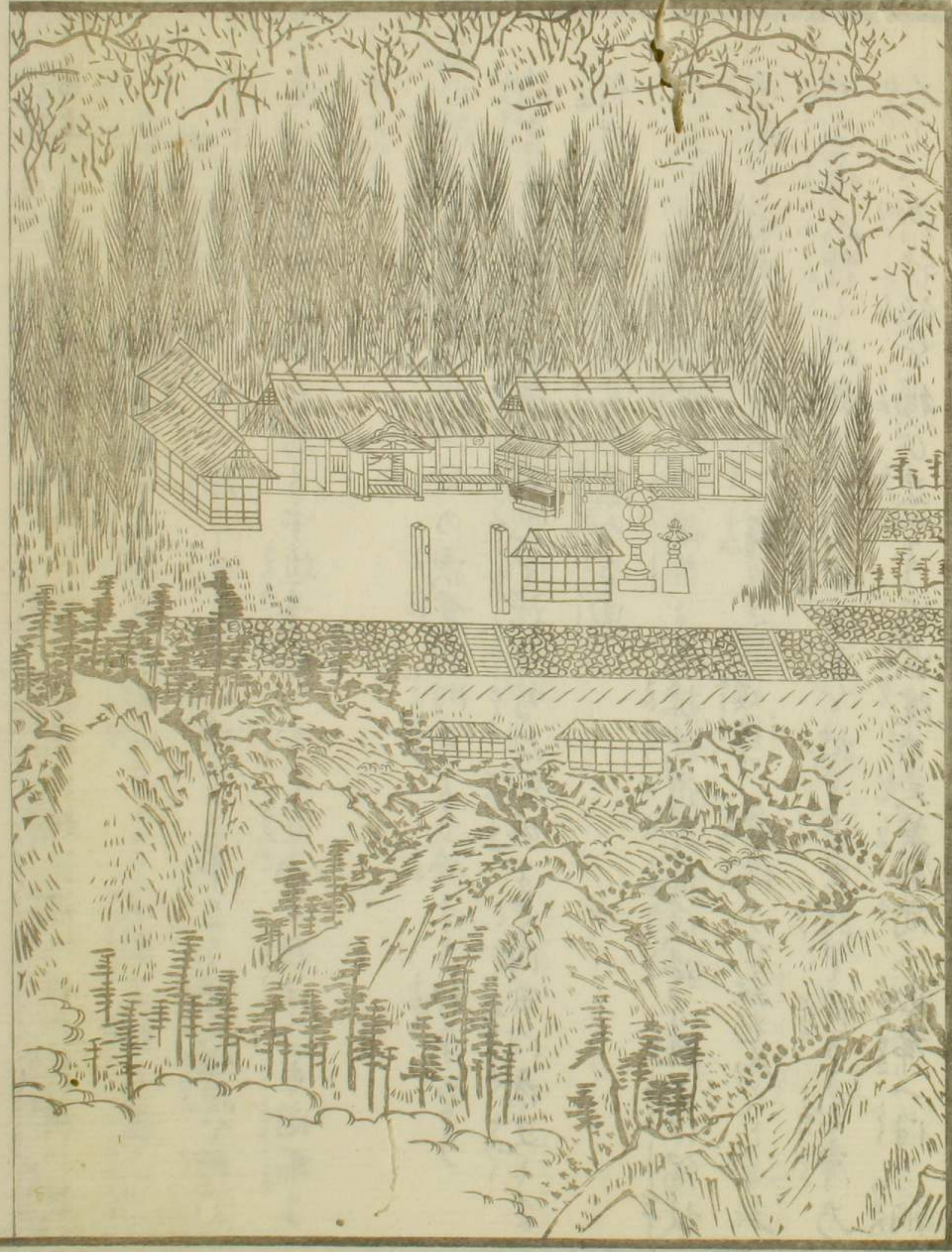
廣龍入道一其人乃電事禁ずる為に經吳せられり也  
兩大師 慈惠大師慈眼大師是也名附く兩大師と稱せしむるも  
亦大師乃尊像山内乃寺院德光院と除きて其地二十日院と月  
遷座しあひ正月に遷座す所本坊へ遷座し遷座す所本坊に遷座す  
月々坊全と巡行し十月を所本坊へ遷座し一月を慈惠大師の律を  
良源俗姓を本津氏近江國濱井郡の産あり延喜十二壬申年九月  
三日出延永觀三丙戌年正月三日示寂し一月仍て益と元と大師  
と稱ふといふ  
入峰禪頂 是を尚山僧徒古より此古實といふ秘する爰の行法か  
道を具といふ人を中々み難むわたりと云ふべし一月にありて  
おておろしつゝふとらるるを記さんといふと云ふ業ありと云  
あまじと更に徳さふと止んをまじ日光山志の本堂にゆゑんを

今がやろけおつたる爰と撮略し其謂とあるさんふを開山と  
人尚山と開しつゝおつたる爰と撮略し其謂とあるさんふを開山と  
多々の山嶽と攀渉す乃喰咀と渉中かの阿私伝は信し一と大五  
の求法雪山大士の若杉と集て師弟執着の勤行と云ふ一と難行  
目と積艱若事と累からうとて尚山開泰の切業と終むるを後  
上人乃没後十餘年の徒才皆遠し師の創業と返起し身の上人若  
て山門踏渉の御法而も終る満のゆきり新嘗の佛鉢と各處に勤  
行し重なる事とおとりお慈慕酒作し打法とひく互にお務む  
今より師の若杉の迹をふみ師の勤行しひく佛鉢と奉り無上  
の法能を著しを報恩謝徳の當とあれお色べうん天長地之乃新皇  
上求下化乃修行を末代乃法孫お侍んもまじ大行に報へうん  
とおのりて大を改定ししと史より入峰乃修行を奉りいと名をひく









古峰原  
隼人主居地

等春山



日光より七里西南の方なり氏と石系と稱し傳へ以先祖八段  
小角に仕へ妙毫鬼の子孫なる由回くより以雨日候し苗山内  
の行者被家一行く一宿し更より入啼する事あり種々俗説を傳ふ  
述ぐを性ある子をあらず近多家と分て豆水と稱するも回雨は  
す先り

床の神事 毎歳正月二日の夜當六時色より修する神事なり

新宮每新文本宮流尾寂光中禪寺皆此別所より日日夜更くは  
修せり以神事火燈系るる由

正月二日夜大樂院下河供下く採燈護摩修法終り机上に湯杖  
申啓と壺を掲て誓々露うくふ頃終り露終りておむんと衆ふ  
時小俗人種々此類成たり或を面と被り出で躍り終り出席乃  
人々新神酒を賜ひ更より大樂院の大茶の向へ出席一日一節

碗おせんぶの餅成登て露く一出一儀終り更より給仕と誓々衆  
ら以爲き言々中々又更より俗人出で躍り終り新神と流るなり  
是もまた終途を本神乃大なる物乃内くくくの新物或を手遊  
の張子其外野菜の菓子あど餅多或を新儀餅等も多分なり是  
内へ食子をども入る者進ぬやうやう先を前ちらすより一と  
一同小籠を出て各多ひ拾ひて退散是先より新神事とつて出席  
の古役人衆へを書院より新料理出るといふ







